

毎日ムック 2016年9月30日発行 掲載
病院最前線シリーズ

病院最前線

眼科日帰り手術・
近視診療

情熱医療
プロフェッショナル
ドクター
PROFESSIONAL
DOCTOR

いくの眼科

2017

いくの眼科

生野 恭司 院長

大阪大学招へい教授、金沢大学臨床教授

いくの・やすし

1990年、大阪大学医学部卒業。92年、国立大阪病院（現・国立病院機構大阪医療センター）。97年、大阪大学医学部眼科助手、米国Harvard大学Schepens眼研究所留学。2000年、大阪大学医学部眼科助手復職。02年、同学内講師。07年、同講師。14年、金沢大学医学部眼科非常勤講師（兼任）。15年、いくの眼科開設。大阪大学招へい教授（兼任）、金沢大学臨床教授（兼任）。日本眼科学会認定眼科専門医。日本強度近視学会副理事長、国際病的近視学会（iPM）理事、脈絡膜画像診断研究会代表世話人、近視緑内障研究会世話人、Retina Glaucoma Club（RGC）世話人



「目に悩む患者さんを一人でも多く治したい」との願いから 日帰り手術と近視診療を2本柱に高度医療で実績を上げる

身近になった高度な眼科医療と 理想的な治療環境を提供

「高度な眼科医療とは大きな病院にしかできないものだろうか？それが最初の発想でした。大病院時代、患者さん一人ひとりに向かい合うことができないジレンマを痛切に感じていました。このため昨年7月に開業を決意し、患者さん一人ひとりが十分に納得できる優しい医療を心がけています」といくの眼科の生野恭司院長は話します。「優しい医療」とは、最低限の負担で高度な眼科医療が受けられ、スタッフ一人ひとりが丁寧に対応できる患者さん本位の医療のことであるという。

生野院長は、大病院の煩雑なシステムが患者さん一人ひとりと深く向き合うことを難しくしていると思い、開院にあたっては、検査、診察、手術などの診療情報を瞬時に把握できる診療情報システムづくりを心に砕いた。大病院の場合、医師が一生懸命働いたとしても、周囲のスタッフの動きと電子カルテが連動して機能していません。このため、二人の医師が朝から夕方まで必死に診ても30〜40人が限界です。一方、患者さんも行けば必ず数時間待ちの状態で、治療に集中するどころか、高齢や全身疾患のある方には非常に酷な環境です。最後に医師にたどり着いても、患者さんでなくパソコンにばかり目が向いて、十分な説明を受けられ

なかつたという不満を抱くこともしばしばです。そこで、まずは人員配置や診療システムをもう一度見直し、医師も患者さんも、そしてスタッフも、みんなが目を治すことに専念できるような仕組みを築き上げました」

開院から1年間あまりで 900件近い日帰り手術の実績

同院では、日帰り手術と近視診療を2本柱に高度医療を行っている。開院当初から多くの患者が集まっており、2015年7月〜2016年6月で水晶体再建術637件、硝子体切除術227件、網膜復位術6件、その他手術14件、2016年4月から開始した眼瞼・涙道手術14件の計894件の日帰り手術を行った。理由として、高い手術技術と快適なホスピタリティ、そして近隣眼科からの厚い信頼が寄せられていることによる。実際に500人以上の患者さんが、他の眼科からの紹介である。また、救いを求めて和歌山や岡山・広島など遠方から訪れる患者さんも多い。必要な方には近隣のホテルを紹介しているという。「強度近視を正確に診断できる医師はまだまだ不足しています。生野院長は数少ない近視のプロフェッショナルとして、西日本全域から多くの患者を引き受けている。

「日本で失明する人のほとんどは強度近視や加齢黄斑変性をはじめとする網膜の病気によるものです。網膜は神経組織のた

め、一旦痛んでしまうと、ほとんどの場合回復しません。そのため、初期治療から全力で取り組む必要があります。網膜の病気は、診断や治療の選択が難しいため、高い治療技術や経験が要求されます」

同院の強みは、重度の網膜剝離や糖尿病網膜症など、難易度の高い手術も日帰りで行えることだ。それは、これまで20年以上にわたり大阪大病院で網膜・近視・白内障手術など先端医療に取り組んできた経験と実績に裏打ちされたものともいえる。

生野院長は、大病院時代から日帰り手術を推進してきた。「高齢の患者さんを長期入院させると、慣れない環境から認知症が進んだり、転倒したりということがありました。患者さんや家族にとっては、退院してからの重要なことです。このような悔しい思いから日帰り手術にシフトした生野院長。「高い技術さえあれば、どんな患者さんでも日帰り手術で問題がないことがわかりました。これが今の自信につながっています」

取材したこの日は、白内障手術7件、硝子体手術3件、うち2件は白内障との同時手術であった。もちろんすべて日帰り手術である。このような複雑な手術を多数例行っても、手術は短時間で進行するため、患者さんの負担は極めて少ない。また、麻酔科医師が手術中に常時待機しており、からだの合併症がある患者さんに対応している。「からだの病気があるだけで、視力回復の希望を捨ててほしくないのです。生野院長の熱意が伝わってくる。

**近視の最新治療に取り組み
世界各国で発信に努める**

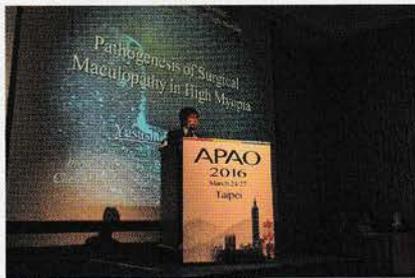
近視については、大学病院の時代から臨床研究に取り組んでおり、軸性近視の予防及び治療剤の特許も取得している（出願番号：特開2011-144111）。

「近視は日本だけでなく、中国、韓国、シンガポールなどでも多い疾病です。ヨーロッパではイタリア、フランスに多く、アメリカやイギリスは少ないという特徴があります。こうした背景から、欧米からの情報発信は極めて少なく、アジア特に日本の近視研究が世界をリードしているといっても過言ではありません」。生野院長は、国内外でも近視研究の第一人者であり、その最新治療を世界に発信するため、欧米や東南アジアを中心に多くの招へい講演を依頼されている。「常に世界で最先端の知識をもって診療にあたること」。生野院長が自らに課した理念である。

**人材育成に力を注ぎ
チーム医療で安心の手術を目指す**

同院で高度医療を実現できるのは、大学病院と同等の最新の診断機器と手術設備を導入し、網膜や近視などの難しい疾病の診断や治療を可能としているからだけではない。

医療の質を高めるには、医師一人の力には限界があることも認識しており、コメディカルなど人材育成にも力を注ぐ。「医療を支える根幹は、機器や道具ではなくて人で。その点、当院のスタッフは各分野のエキスパートを選びすぎりました。彼らは、大学病院など第一線で訓練された看護師や視能訓練士で、チーム医療により安全な手術・治療を目指しています」。手術に対する家族の理解と協力を得るため、説明会なども頻繁に開いているという。また、どんな人でも初めての手術には戸惑うことも多い。「手術前後のケアに関しては当院のスタッフがきめ細やかに指導しています」。技術だけでなく、安心を提供することも忘れない。



昨年は上海で硝子体手術の教育講演を行い、今年3月には台北で招待講演を行うなど、海外での手術教育に積極的に貢献している



経験豊富なスタッフとの連携で、白内障から網膜硝子体手術まで、眼科のあらゆる手術を日帰りで行う



高精度な診断を行うため先端機器を取りそろえた明室検査室



3台の眼底カメラ（1台は広角撮影用）のほか、光干渉断層計も3種類導入し、大学病院と同等の検査機器を用意している



広々とした診察室。「リラックスした雰囲気でお話ができるよう心がけています」と生野院長

いくの眼科

大阪府大阪市淀川区十三東2-9-10 十三駅前医療ビル3F
(TEL) 06-6309-4930
<http://www.ikuno-eye.com/>

【診療時間】月・火・木・金 9:00~12:00 / 14:30~17:30
水・土 9:00~12:00
【休診日】水午後・土午後・日・祝

**どんな病気でも、どんな悩みでも
あきらめずに気軽に相談を**

開院するにあたって、院長が最も気にしたのは、交通アクセスであった。眼科の患者さんにはお年寄りも多く、足が不自由な方も多い。便利で通院しやすい環境は、絶対条件であった。いくの眼科は立地条件もよく、交通の利便性に優れている。「阪急十三駅は、大阪だけでなく、京都や神戸方面からの患者さんも来院しやすい好立地にあります。また、駅前にあることから、歩くのがつらいお年寄りも容易に通院が可能です」

網膜や強度近視の難しい疾病では、他の眼科で回復不可能といわれても、希望がないわけではない。「目に悩む患者さんを二人でも多く治したい」という願いの生野院長。「どんな病気でも、どんな悩みでもあきらめずに相談ください。目は心の窓。目が見えなくなることは、心を閉ざすのと同じです。視力のため患者さんと一緒に頑張って全力で取り組むのが、私のライフワークです」と決意を語った。



クリニック 所在地

〒532-0023
大阪市淀川区十三東2-9-10
十三駅前医療ビル3階

阪急十三駅東出口すぐ

【電車でお越しの場合】

阪急十三駅東出口を出て、
徒歩30秒（地図参照）

【バスでお越しの場合】

大阪市バス十三駅東口下車。
徒歩3分

【自転車でお越しの場合】

十三駅前医療ビルには
駐輪場はございません。

【お車でお越しの場合】

提携駐車場はございません。
徒歩数分の十三東3丁目付近に
コインパーキングが多数あります。
適宜ご利用ください。

【遠方よりお越しの場合】

【高速バス】

梅田もしくは大阪駅バスターミナルで下車し、阪急電車にお乗りかえください。
神戸線、宝塚線、京都線どの路線に乗っても大丈夫です。ごく一部をのぞき、次の停車駅が十三です。

【新幹線】

新大阪駅でお降りください。タクシーの場合「十三駅東口バス停」とお伝え下さい。
10～15分程度です。地下鉄を乗り継ぐ場合は、御堂筋線南行きにお乗りになり、
次の「西中島南方」で阪急線に乗り換え。梅田方面行きに乗車すると、次の駅が十三です（約15分）。

【飛行機】

伊丹空港から路線バスもしくはタクシーで阪急蛍池駅へ（5～10分程度）。
蛍池から阪急宝塚線に乗車し、梅田方面へ向かいます。
どの列車に乗っても、十三駅に停車します（急行であれば15分ほど）。
空港から直接タクシーで直接来られる場合は、「十三駅東口バス停」とお伝えください。30分程度です。